

原著論文

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスにおけるニホンアナグマ  
*Meles anakuma* Temminck, 1842 の観察記録

廣瀬 舜・松本 敬・堀江真帆・湯浅拓輝・中江雄一郎・一ノ瀬友博

Shun Hirose, Kei Matsumoto, Maho Horie, Hiroki Yuasa, Yuichiro Nakae and Tomohiro Ichinose: A record of Japanese badger *Meles anakuma* Temminck, 1842 at Keio University Shonan Fujisawa Campus, Kanagawa Prefecture, Japan

**Abstract:** This study reports the latest observation of the Japanese badger *Meles anakuma* Temminck, 1842 in the south-eastern part of Kanagawa Prefecture, recorded by a trail camera at Keio University Shonan Fujisawa Campus (SFC) on April 24, 2025. The captured individual, estimated to be an adult, was seen foraging briefly before moving into a forested area. The SFC covers 31 hectares, including 13 hectares of mixed evergreen and deciduous forest, wetland biotopes, and grasslands that support high biodiversity. Although the Japanese badger has been known to inhabit mountainous areas such as Hakone and Tanzawa, recent records from urban and suburban areas—including the Honson area of Chigasaki City and the Mirokuji area of Fujisawa—indicate a wider distribution. The badger’s appearance at SFC is likely related to breeding-season movements or dispersal by a young individual. As the south-eastern part of Kanagawa Prefecture has undergone extensive urbanization, the SFC remains one of the few large and continuous green spaces, functioning as an important habitat and corridor for medium-sized mammals. Long-term camera-trap surveys conducted from 2016 to 2025 have recorded 9 mammal species, including raccoon *Procyon lotor* Linnaeus, 1758, raccoon dog *Nyctereutes procyonoides viverrinus* (Temminck, 1838), and masked palm civet *Paguma larvata* (Smith, 1827), confirming the ecological significance of this campus within an urbanized landscape. Although this is a single observation, it represents a valuable record for understanding the range expansion and habitat use of the Japanese badger in suburban area in Japan. Continued monitoring and landscape-scale research are needed to clarify population trends and to promote the conservation of native wildlife in the south-eastern part of Kanagawa Prefecture, where remaining green networks play a critical role in maintaining biodiversity.

緒 言

ニホンアナグマ *Meles anakuma* Temminck, 1842 は日本固有の動物であり、本州、四国、九州に生息している (Kaneko, 2015)。ニホンアナグマ (以下、アナグマ) の生息には丘陵地の山林にアクセスしやすい緑地を必要とするケースが多いとされていたが、都市化が進んだ地域の小規模緑地でも生息が確認されており、人家や交通量の多い道路から近い林縁にも繁殖用の巣穴を作る場合がある (農林水産省, 2024)。土壌生物や小動物を捕食し、春から夏の間に交尾、翌年の春に出産を行う。(米田, 2008)。

神奈川県における本種の主な生息域は県西側に位置している (環境省自然環境局生物多様性センター, 2022b)。山地における具体的な事例として、2004年から2006年にかけて秦野市東部の丹沢山地権現山地区で実施されたカメラトラップ調査において本種が確認されており (藤吉ほか, 2007)、丹沢山地全域を対象とした哺乳類相調査

においても、山麓部から稜線部のブナ林に至るまで広い範囲に生息することが示されている (山口, 2007)。さらに近年においても、小田原市入生田地区での哺乳類調査で確認され (鈴木, 2022)、丹沢山地堂平地区に設置されたカメラトラップ調査ではブナ林での出現が確認されている (大石ほか, 2023)。加えて、神奈川県西部の山地に位置する玉川大学箱根自然観察林においてもアナグマの生息が確認されている (關, 2018)。

丘陵地や都市郊外においても、生息が確認されている。神奈川大学湘南ひらつかキャンパス (大磯丘陵) では、2018年から2019年の調査により生息が確認された (岩崎ほか, 2021)。また伊勢原市においては、市内全域で本種の生息が確認されており、令和3年度には果樹において0.02 ha、72,000円の農業被害が記録されている (伊勢原市, 2023)。

これらの記録を踏まえると、神奈川県におけるアナグマは、箱根や丹沢の山地、大磯などの丘陵地に加え、そ

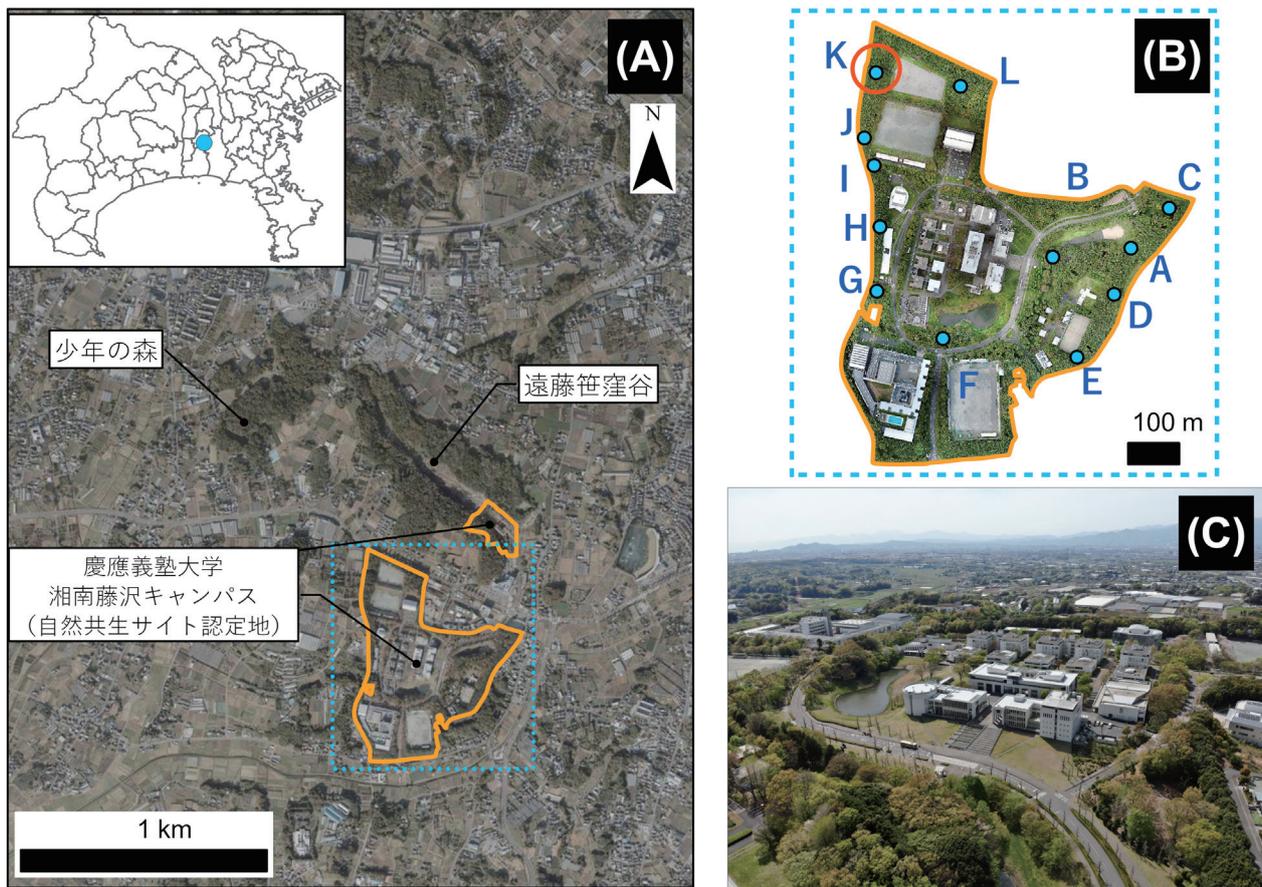


図1. キャンパスの位置図と上空から見た風景. A: 空中写真, 全国最新写真(国土地理院)をもとに作成; B: 詳細図, ドローンの空撮画像をもとに作成したオルソ画像; C: 上空からの風景, ドローンにより撮影.

れらに隣接する都市郊外を含む相模川以西の地域が主な生息域とされる。相模川以東では、2018年4月に茅ヶ崎市本村地区の住宅地で成獣が撮影・報告された例(馬谷原ほか, 2019)や、2018年5月5日の相模原市立博物館周辺の確認(秋山, 2022)、環境省「モニタリングサイト1000里地調査」(環境省, 2022)において川崎市多摩区で生息が確認されているものの、横浜市における陸域生物調査2012–2021(七里・中里, 2023)、2011年から2013年に実施された藤沢市の自然環境実態調査ではアナグマは記録されなかった(藤沢市, 2014)。

今回の対象地域である神奈川県藤沢市では、中・大型哺乳類分布調査の情報源リストに、2016年のアナグマ捕獲報告が記録されている(環境省自然環境局生物多様性センター, 2022a)。加えて2022年に藤沢市弥勒寺周辺でも目撃されている(湘南村岡不動産, online)。2025年4月には慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス(以下キャンパス; 図1)において継続的に実施しているカメラトラップ調査で本種が撮影され、藤沢市における3例目の確認記録となった。この記録は、神奈川県東南部で確認例の少ないアナグマに関する貴重な記録であり、今後の分布動向把握および保全において重要である。本報告ではその出現要因について考察した。

## 材料と方法

キャンパスは敷地面積が約31 haで、標高は18–38 mに位置し、比較的起伏に富む。約13 haの樹林地を有し、主にシラカシ *Quercus myrsinifolia* Blume やアラカシ *Q. glauca* Thub.、スダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatus. ex T.Yamaz. et Mashiba subsp. *sieboldii* が優占する常緑広葉樹の造成林と、キャンパス造成前から残るクヌギ *Q. acutissima* Carruth. やコナラ *Q. serrata* Murray が優占する落葉広葉樹の二次林で構成されている。他に調整池や植栽されたハンノキ *Alnus japonica* (Thunb.) Steud. を主体とする湿地性ビオトープなどの水辺環境、草地環境が広がっている。周囲には住宅地が存在し、藤沢市都市計画道路3・3・9号「遠藤宮原線」が通過している。藤沢市内でも生物多様性が高いエリアの1つである遠藤笹窪谷に隣接し、エコロジカルネットワークの一角に位置する(藤沢市, 2011)。様々な自然環境が維持されることで、2015年から2025年までの慶應義塾大学一ノ瀬友博研究会の調査で計572種の生物が確認されており、環境省や神奈川県レッドリストに記載のある希少な動植物は71種記録されている。哺乳類では、トレイルカメラの調査によってニホンノウサギ *Lepus brachyurus* Temminck, 1844, ホンドタヌキ *Nyctereutes procyonoides viverrinus*



図 2. 2025 年 4 月 24 日に記録された個体 . A: 地面を嗅ぐ動作を見せている画像 ; B: 頭部の特徴が見られる画像 .

(Temminck, 1838), アライグマ *Procyon lotor* (Linnaeus, 1758), ハクビシン *Paguma larvata* (Smith, 1827) など 9 種が確認されている。2025 年 3 月には環境省の「自然共生サイト」に認定された。

キャンパス内でのカメラトラップ調査は、2016 年 6 月より遠藤笹窪谷に隣接するエリア（図 1A の北側の橙色枠）にて、2 台のみの部分的な運用で開始した。その後、2022 年 7 月より本対象地の樹林内（図 1B）において 2 台で運用を開始し、2024 年 4 月より現在の 12 台まで個数を増やして撮影を行っている。トレイルカメラ（ハイカム SP2, ハイカム社）は樹木の幹に取り付け、カメラの前を通過した哺乳類を撮影している。カメラは地上から 1.2–2.0 m の高さに固定し、動画および静止画の両方を撮影する設定とした。定期的にデータの回収を行っており、今回アナグマを確認したのは、2025 年 2 月 7 日から 5 月 21 日までのカメラ駆動期間であった。

## 結 果

2025 年 4 月 24 日 3 時 23 分、キャンパス内に設置された 12 台のトレイルカメラのうち、北西の林縁部に配置した「K カメラ」（図 1B；35°23'29.2"N, 139°25'30.6"E; WGS84）が 1 個体を記録した（図 2A, B）。「K カメラ」の標高は 36.9 m であり、周辺はシラカシが優占する常緑広葉樹林で構成され、林床にはアズマネザサ *Pleioblastus chino* (Franch. et Sav.) Makino が優占するものの、照度が低いため下層植生の密度は低い状態となっている。また当該地点は校舎や運動場などの施設と隣接しており、人為利用空間と樹林地が接する環境を形成している。撮影時の気温は 17 °C（カメラ内蔵温度計）であった。当該個体は樹林内の西側から出現し、地面を嗅ぎながら餌を探すような行動を示した後（図 2A）、南側の林内へと移動し、姿を消した。観察時間は約 5 秒間で、確認できたのはこの一連の通過のみであった。

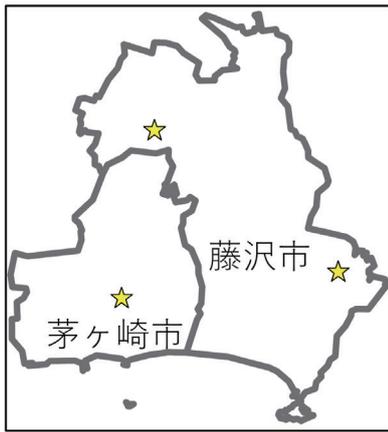
## 考 察

記録は赤外線動画および静止画 2 枚からなり、個体の頭胴長は画像上の比較から 60 cm 前後と推定され、成獣と考えられる。雌雄は判別できなかった。今回の観察動画および画像は夜間の赤外線撮影であったため白黒であるが、アナグマの特徴としてみられる四肢と胸部が黒色を呈し、鼻鏡部中央は白く目立つ顔模様（鮫島ほか, 2015）が確認された（図 2A, B）。これらの特徴から、記録された個体はアナグマであると判断した。

次に県内の主な生息地である箱根・丹沢の山間部や大磯丘陵から離れた県東南部で発見された要因を検討する。既知の生態に関する情報と本調査地の環境条件を踏まえると、本調査で確認された要因について、主に 2 つの可能性が考えられる。

第一に、繁殖期におけるオスの行動圏拡大という行動特性（田中, 2002）により、付近の丘陵地などから一時的に移動してきた可能性である。アナグマの行動圏は季節的に変動し、繁殖期にあたる春季にはオスが行動圏を拡大してメスの行動圏に進入する例が報告されている（田中, 2002）。性的に成熟した 2–3 歳の若いオス成獣は、3 月から 5 月にかけて行動圏を広げ、隣接するメス成獣の行動圏に進入する行動が確認されており、4 歳以上の成熟オスは春から夏にかけて広い行動圏を維持し、複数のメス成獣の行動圏を包含して巡回・におい付けや交尾行動を示すとされている（田中, 2002）。今回アナグマが確認されたのは 4 月であり、行動圏拡大のため移動中の個体が記録された可能性がある。

第二に、本種は微小な緑地を利用した繁殖が都市近郊で記録されていること（上遠ほか, 2019）から、調査地周辺において繁殖が行われていて、当地を採餌環境の一部として利用していた可能性である。アナグマの生息環境選好性に関しては、牧草地など草丈の低くミミズ類の捕食が容易な環境の比率が高いことが、個体数が多く保たれる重要な要因であると指摘されている（山本,



### ★ アナグマ生息確認位置

- ①今回確認した地点  
(藤沢市遠藤・2025年)
- ②藤沢市内での目撃情報  
(藤沢市弥勒寺・2022年)
- ③馬谷原ら(2019)の報告  
(茅ヶ崎市本村・2018年)

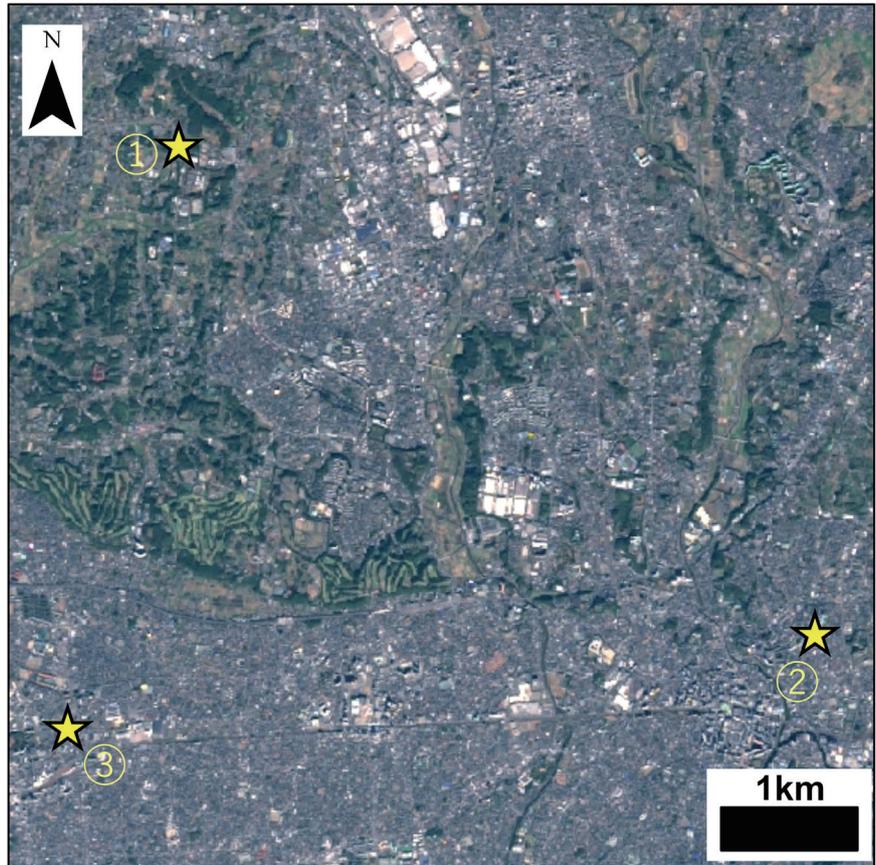


図3. アナグマ生息確認位置図。全国最新写真(国土地理院)をもとに作成。①は今回確認した地点(藤沢市遠藤・2025年)、②は湘南村岡不動産(online)(藤沢市弥勒寺・2022年)、③は馬谷原ほか(2019)の報告(茅ヶ崎市本村・2018年)を示す。左上の地図は藤沢市と茅ヶ崎市の位置関係を示している。

1991)。また、主要な餌資源の多くが樹林と農地の生態学的移行帯、すなわち林縁部に分布すると報告されている(Kaneko *et al*, 2006) ことや本種が甘味のある作物に対する嗜好性が高く果樹類に対する採食被害が報告されている(中村ほか, 2021) ことなどからも、本種が樹林環境だけではなく開放地が隣接する環境を好むと考えられる。これらの条件を考慮すると調査地は、常緑および落葉広葉樹林、草地、湿地環境が連続的に配置された景観構造を持ち、さらには周辺に柿や梨などを栽培する果樹園が点在しており、調査地およびその周辺環境は本種の採餌に利用可能な環境であると考えられる。ただし、本調査では2024年から1年近くキャンパス内に12台のカメラを設置している中で、確認されたのは1度のみであることから調査地内での繁殖は考えにくい。SFCキャンパス(図3の①)の近隣では、藤沢市弥勒寺周辺(湘南村岡不動産提供、記載許可済; 図3の②)や茅ヶ崎市本村(馬谷原ほか, 2019; 図3の③)において記録され、近年この一帯でアナグマの確認が複数報告されている。これらの3地点の周辺は、樹林地と草地や農地が接する林縁環境を含む点で共通しており、茅ヶ崎市本村周辺には赤羽根字十三区周辺特別緑地保全地区や湘南カントリークラブといった比較的規模が大きく連続した緑地

が存在し、藤沢市弥勒寺周辺においても新林公園や寺社林などのまとまった緑地が近接している。単独で大きな緑地が存在しない場合でも、断片的な連続緑地が集中している場合に生息地として機能することが報告されており(白濱ほか, 2020)、3地点の間に位置する藤沢市の西北部から茅ヶ崎市北部にかけて広がる丘陵地はその条件を満たしている可能性が高い。したがって、すでに本種の生息地として機能しているか、今後定着する可能性は十分に考えられる。

ここまで今回の発見を基に当地域でのアナグマの生息の可能性について検討した。ただし、本報告は慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス内で確認された1例のみの記録であり、現時点で当地域でのアナグマの生息要因を断定するには至らないことには留意する必要がある。今後は繁殖期以外の季節における継続的な出現状況、巣穴の有無、複数個体の確認などを含めた追加調査を行い、県東南部におけるアナグマの分布動態の把握が求められる。具体的には、近接するまとまった緑地においてトレイルカメラ等のモニタリングを重点的に行うことで、繁殖地の特定や行動圏の把握につながる可能性があると考えられる。

## 謝 辞

本報告の作成に際し、藤沢市弥勒寺周辺におけるアナグマの目撃情報をご提供くださった湘南村岡不動産の友本氏、現地調査に協力いただいた慶應義塾大学一ノ瀬友博研究会 SatoFC プロジェクトのメンバーに、ここに厚く御礼申し上げます。

## 引用文献

- 秋山幸也, 2022. センサーカメラがとらえた相模原市立博物館周辺の樹林地に生息する鳥類と哺乳類. 相模原市立博物館研究報告, (30): 1-6.
- 藤沢市, 2011. 緑地の配置計画. 藤沢市まちづくり推進部まちづくりみどり推進課, 藤沢市緑の基本計画, pp. 39-54. 藤沢.
- 藤沢市, 2014. 藤沢市自然環境実態調査 調査で確認された生物種一覧. 446 pp. 藤沢.
- 藤吉敬子・宇山 智・井上和宏・浅野嗣三・渋谷香奈子・瀧澤 恵・菅原野花・岩本 順・藤原怜史・黒島祥一・竹村和記・石川康裕・藤吉正明, 2007. 神奈川県弘法山公園において自動撮影と夜間観察で得られた哺乳類の記録. 神奈川自然誌資料, (28): 59-65.
- 伊勢原市, 2023. 伊勢原市鳥獣被害防止計画. 15 pp. 伊勢原市経済環境部農業振興課, 伊勢原.
- 岩崎貴也・奥田真未・渡部凌我・斎藤昌幸・土田彩加・志村映実・泉 進, 2021. カメラトラップで確認された神奈川大学湘南ひらつかキャンパスにおける哺乳類相とキャンパス建設前後の変化. 神奈川自然誌資料, (42): 71-75.
- 上遠岳彦・堀 淑恵・菅原鮎実, 2019. 東京都三鷹市の都市緑地の哺乳類相とニホンアナグマ *Meles anakuma* の繁殖記録. 自然環境科学研究, (23): 15-20.
- Kaneko Y., Maruyama N. & Macdonald D. W. 2006. Food habits and habitat selection of suburban badgers (*Meles meles*) in Japan. *Journal of Zoology*, **270**: 78-89.
- Kaneko, Y., 2015. *Meles anakuma* Temminck, 1842. In *The wild mammals of Japan 2nd edition*. pp. 266-268. Shoukadoh, Kyoto.
- 環境省, 2022. 環境省「モニタリングサイト1000 里地調査」(中・大型哺乳類調査データ, 2006-2012).
- 環境省自然環境局生物多様性センター 2022a. 「令和3年度 中大型哺乳類分布調査 資料一覧」(情報源リスト, Excel).
- 環境省自然環境局生物多様性センター, 2022b. 令和3年度(2021年度) 中大型哺乳類分布調査調査報告書 タヌキ・キツネ・アナグマ. 136 pp. 環境省自然環境局, 富士吉田.

- 馬谷原武之・小室明彦・山岸幸矢, 2019. 茅ヶ崎市の住宅地におけるニホンアナグマ *Meles anakuma* の観察記録と生息環境の検討. 神奈川自然誌資料, (40): 103-106.
- 中村南美子・萩之内竹斗・浅野陽樹・池田 充・龍野巳代・赤井克己・大島一郎・中西良孝・高山耕二, 2021. 地方都市における大学キャンパスでのニホンアナグマ *Meles anakuma* の出現および被害発生状況. 鹿児島大学農学部学術報告, **71**: 23-30.
- 農林水産省, 2024. 野生鳥獣被害防止マニュアル中型獣類編 令和6年3月版. 12-13 pp.
- 大石圭太・雨宮 有・山根正伸, 2023. 丹沢山地堂平地区のブナ林におけるニホンジカの採餌行動と中大型哺乳類の撮影記録. 神奈川県自然環境保全センター報告, (17): 73-76.
- 鮫島正道・宅間友則・角 成生・今吉 努・下沖洋人・東郷純一・中村麻理子, 2015. アナグマの被害に対する河川堤防の保全策. *Nature of Kagoshima*, **41**: 7-15.
- 關 義和, 2018. 箱根自然観察林に生息する野生動物一特にツキノワグマについて. 玉川大学農学部研究教育紀要, (71): 39-42.
- 七里浩志・中里亜利咲, 2023. 横浜市における陸域生物調査 2012-2021 について. 横浜市環境科学研究所報, (47): 35-43.
- 白瀨秀至・斎藤昌幸・金子弥生, 2020. 行動圏サイズに基づく東京都におけるニホンアナグマの生息の検討. 哺乳類科学 **60**(2): 229-236.
- 湘南村岡不動産, online. アナグマ?に遭遇しました! 2022年7月6日. [https://www.shonan-muraoka.co.jp/blog\\_20220706/](https://www.shonan-muraoka.co.jp/blog_20220706/) (accessed on 2025-September-6)
- 鈴木 聡, 2022. 自動撮影カメラで確認された神奈川県小田原市入生田地区の哺乳類相. 神奈川県立博物館研究報告(自然科学), (51): 81-88.
- 田中 浩, 2002. ニホンアナグマの生態と社会システム. 山口大学大学院理工学研究科自然共生科学専攻博士論文. 40 p.
- 山口喜盛, 2007. 哺乳類. 丹沢大山総合調査団編, 丹沢大山動植物目録. pp. 68-71. 平岡環境科学研究所, 相模原.
- 山本祐治, 1991. 長野県入笠山におけるニホンアナグマの食性. 自然環境科学研究, **4**: 73-83.
- 米田政明, 2008. アナグマ. 阿部 永監修, 日本の哺乳類 改訂2版, p. 87. 東海大学出版会, 秦野.

---

廣瀬 舜・松本 敬・堀江真帆・一ノ瀬友博: 慶應義塾大学環境情報学部; 中江雄一郎: 慶應義塾大学総合政策学部; 湯浅拓輝: 慶應義塾大学政策・メディア研究科  
(受領 2025年10月31日; 受理 2026年2月14日)